



「博士号か専門医か」 (Medico de la Peste)

名誉院長 西 田 敬

最盛期には欧州で全人口の25%が死亡。猛威を奮って、中世のヨーロッパを震撼させたペスト。病勢の終末期には皮膚の色が黒変するので、黒死病 (scwarzen Tod) と恐れられた。何時の世にも専門家を標榜する医者が蔓延るもの。ペスト専門医をスペインやイタリアではMedico de la Pesteと云った。ハロウィン紛いの扮装で人々の畏怖心を煽った。若し、欧州のイタ飯屋でMedico de la Peste等としたり顔で喚けば、聞き間違い必定で、パスタ料理を提供される事、請合い。そう云えば、日本のマスコミ界で縁起でもない御託宣の場合に持て囃されるノストラダムス (M. Nostradamus) 君も一介のペスト医、大予言などと餘り有難がらぬ方が御身の為には、無難デスゾ。

悪性腫瘍の専門医と云っても、癌などの宿痼を直す秘法や秘術に長けている訳では決してない。引導を渡す事を専らとする点では、嘗てのペスト医者と何ら変わる処はない。インターネットの普及で医学の分野も最新知識や新知見が御手軽に蔓延し易くなった。恰も知識の均霑化、まるで毎年、国際学会に出席している様なもの。学術集会の目玉であるシンポジウムのネタも臈て出尽くし、各種の医学会も店仕舞を覚悟するかと思いきや、知恵袋は居るもので、専門医や認定医の資格販売を始め居った。昔日の神社や仏閣が御守札や護符を売捌いて儲け、潤った事と何ら変わらぬ。厄介な事に、お上 (厚労省) までもが、天下り先確保の為か、便乗して医学会の後盾と為りそうな気配すら感じられる。専門医や認定医の煽りを喰って、最近では影が薄くなったのが医学博士号。汗牛充棟と云えば学位論文を仕上げる為に読み上げておく可き参考文献の嵩の喩。其の量たるや、半端じゃなく、何とも凄まじい。書庫の軒に問え、車を曳かせた牛でさえ、重さで体躯が汗ばむ程の量。学会の序に購入した専門医認可証の紙切れなんかとは格が違う。精読するだけでも先人の労苦が偲ばれる値打モノで、且つ、御負けに習字や書取りにも強く為れる。癌専門医を嘯くならば、其処に至った歴史的背景をも熟知された上で、改めて問う。医学博士と専門医、買うなら如何方？

